

編集後記

Editor's postscript

今日、日本で編める、最高の精神分析の本をつくる——そう意気込んで本号を編集した。私としては、二つの座談会はそれぞれに通り一遍でない議論が交わされたと感じているし、またケース論文も精神分析の「たのしさ」「よさ」を伝える、すばらしいものが集まったと思っている。精神分析と人文、人文と精神分析の交点を形成してくれた諸論文も、これからの相互交流の基盤を提供してくれていると思っている。だが、評価は読者に委ねるほかない。

私はずっと、著者・編者として、私自身の評価と読者の評価、そのどちらをも重視してきた。私自身が満足したからよい本なのではない。読者が満足したからよい本なのでもない。その両者の緊張関係のなかでこそ、本は生きる。

そういう私の目から見ると、前者ばかり重視し、後者を軽視しているように見える著作や著者は少なくない。むしろ、桁違いに面白いもの、美しいもの、有用なものであれば、読者の目など意識しなくても自然に読まれる、というのも一定は事実だろう。そういった方略を取ることを否定はしない。だが少なくとも私は、「どう読まれるか」を重視することが、精神分析がこの国で生き残っていくために必要なことだと思っている。

この対立項は、むしろ、私が臨床において「専門家評価」と「ユーザー評価」と概念化してきたことと対応している。つまり、精神分析という臨床のなかでも、治療者の考えが優先され、患者の声が、患者が、聞かれなくなっているのではないか、という疑義が私にはある。と同時に、患者の声を聞こうとするあまりに、逆に患者（の無意識部分）を聞けなくなってしまうという事態が発生していることも知っている。

その相克にこそ臨床の機微があるのは当然のことである。その機微について、「それは言葉にできない」と開き直るのではなく、できる限り詳らかにしようと試みたのが、本号である。座談会からケース論文まで、誌面のすべてにこの緊張関係が通底している。

もう一方の柱である、人文知との邂逅は果たされただろうか。私としては、再起動の緒に就いたのではないかと感じているのだが、いかがだろうか。

少なくとも言えることは、人文知との交流を豊かにするためには、精神分析側の不断的な努力が求められるということである。再接続のムーブメントを本号単体で終わらせずに、継続させねばならない。そのためには、私個人の努力では足りない。業界全体で「外」へも目を向けることが必要になる。本号を足掛かりに、この動きが継続的なものになればと思う。

精神分析の「たのしさ」が、一人でも多くの人に伝わり、自分の知らない自分に出会う喜びが広がり、結果として責任を担う主体が増え、世の中が豊かになることを願って。

(山崎孝明)